

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010 年度～2012 年度

課題番号：22530986

研究課題名（和文）造形遊びの創造的行為と教師の役割の関係性に基づく幼小連携授業・保育モデルの構築

研究課題名（英文）The Construction of a Education Model for Articulation from kindergarten to Elementary School based on The Relationship between The Teacher's Roles and Creative Activities in the class of "Zoukei-asobi".

研究代表者

山田 芳明 (YAMADA YOSHIAKI)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：80363175

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、幼稚園から小学校への接続のあり方を、『造形遊び』の授業における教師の指導の在り方」という視点から解明することであった。三年の研究期間の中で、幼稚園教員と小学校教員の協力を得て、二つの素材を用いた 16 の実践を行った。それらの中でも、木片を用いた『造形遊び』の授業は、木片を共通の素材として幼稚園児から小学六年生まで 10 の実践を行った。それらの実践の比較から、幼稚園から小学校への接続の在り方について、いくつかの知見を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to clarify continuity of education from kindergarten to elementary school through thinking about how to teach in the class of "zoukei-asobi". We conducted 16 practices with 2 materials during a term of 3 years in corporation with teachers of kindergartens and elementary schools. Especially with wooden blocks as common material, we conducted 10 practices in "zoukei-asobi" class on children from kindergartener to sixth grade of elementary school. Comparing these practices, we got several ideas of continuity of education from kindergarten to elementary school.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：幼小連携，教材開発，造形遊び，授業分析

1. 研究開始当初の背景

研究開発当時、幼保一体化、幼保一元化等々、各自治体を主体としながら幼稚園と保育所の連携を図る事業への取り組みが進められていた。しかし、こうした取り組みの一

方で、「小一プロブレム」に象徴されるように幼稚園と小学校教育との接続は、必ずしも良好な方向に向かっているとは言い難状況にあった。また、平成 20 年に小学校学習指導要領が改訂され、指導すべき内容は増加し、

総時間数もそれにもなまって増加されたことで、よりいっそうその段差は広がっていく可能性を有していると考えられた。

そもそも、幼稚園と小学校の保育と授業には以前から大きな隔たりを感じている教員は多く、我々プロジェクトチームが行った幼稚園教員と小学校教員へのアンケート調査においても、目標、内容、方法、のいずれにおいても異なるイメージであることが明らかとなっていた。

また、幼稚園においては、自由保育と設定保育とが存在しているが、造形的な遊び活動は「粘土遊び」、「砂場遊び」、「木片の見立て遊び」等々、自由保育、設定保育の差異が小さく、幼稚園教育における「遊び＝学び」の基本的な教育観を実現している活動である。そのため、多くの幼児教育機関で何らかの造形的な遊び活動を取り入れている。一方、小学校においては、昭和52年「教育の人間化」をめざして改訂された学習指導要領において小学校図画工作科の低学年の内容A表現の項目として「造形的な遊び」が位置づけられ、その主旨は「遊びの持つ特性を教育に生かすこと」が唱われ、以降3度の改訂を経て図画工作科を全体の内容として位置づけられている。しかし実際には「造形遊び」の実施率は低い。

このように「造形的な遊び活動」は幼稚園と小学校双方において既に教育の方法・内容として位置づけられている。また、小学校で造形遊びの実施率が低い要因には遊びを教育に生かした指導のモデルが定着していないことが考えられる。一方幼稚園では、小学校に「造形遊び」という内容が存在していることがあまり認知されていない状況にあった。

2. 研究の目的

本研究は「造形的な遊び活動」を観点に、幼稚園、小学校の双方の保育、授業のあり方の見直しを図ろうとした。これまでからも、幼小連携は多くの教育機関で取り組まれてきていた。しかし、そうした取組の多くは、その成果として「小学校の子どもと幼稚園の子どもとの関係性を深めるための単元や行事」がアウトプットされてきた。これは、現状の小学校教育と幼稚園教育を前提に接続を図ろうとする教育現場での取り組みの限界を示している。

そこで、本研究では、幼稚園と小学校で日常的に行われている保育、教育の特性を分析し、幼児から小学生へと連続的に発達成長していく子ども達の「造形的な遊び」に見られる行動の発達の特性を分析することから、幼稚園、小学校双方の保育・教育内容、保育・教育方法への見直しとその提言を目指す。

すなわち、子どもの発達に即した、幼稚園

から小学校への無段階な接続を実現する保育・授業モデルを造形的な遊び活動からさぐるものが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

(1) 本研究の体制及びこれまでの予備的状況について

本研究は、研究代用者、研究分担者の三名に加えて、大阪府下の幼稚園・小学校教員を中心とした30名余りの現場教員と大学研究者で構成する研究組織（通称幼小年造形美術研究会：通称Cap研）の協力を得て行っている。本研究に関連する研究として、既に平成16年度より大阪を拠点に実践研究グループ（幼小年造形美術研究会の前身）をつくり、研究代表者の所属機関の研究費によって少しずつ研究を進めていた。本研究の予備的調査として、以下のような土粘土の造形的な遊び活動における行動の記録及びその一部の分析を行っている。

対象：大阪市内、京都市内の幼稚園の年長児3クラス、年中児2クラス、大阪府下、京都市内の小学校1年3クラス、2年2クラス、4年2クラス

内容：各事例について土粘土300kgを準備し、50分間自由な造形活動を、2度行わせる。それを固定カメラ1台、ハンディカメラ1台を用いて、子どもの行動を撮影し、行動心理学的アプローチにより、子どもの行動内容を分析した。行為性の頻度と、活動の組織、規模の観点からその頻度を抽出し、1度目と2度目の活動内容比較及び、年齢間での活動内容比較を行っている。

成果：この予備調査により、行動分析のための観点を抽出することができた。

(2) 連携研究における「造形遊び」の可能性

「造形遊び」授業のように、材料との関わりから児童の発想や構想が自由に広がっていく授業過程では、まず「導入」においてどのような「場」を設定すればよいのか、そして自由な発想を取り上げながらも、価値ある活動へと導く力量が問われることになる。さらに「展開」では想定外の出来事に対応を迫られる。児童に任せる部分が大きくなればなるほど、教師には臨機応変な対応できる力量が求められるようになる。さらに、いわゆる作品然とした作品ができない場合には事後に作品で評価を行うのではなく、授業過程での児童の取り組みを評価する力量が求められる。このように、「造形遊び」は、小学校の教師の授業イメージの転換を求めるとともに、その過程で働かせる授業力の転換も求めていると考えられる。

ただ、このような造形遊びの持つ特性は、幼稚園での自由保育における教師のみとりの関連性が高いと考えられる。子どもに何をつくらせるのか、ではなく、児童が何を行

い何を学んだのかという学習過程への注目は、今日の小学校教育においても重視されており、造形遊びの実践を行うことで、幼稚園・保育所での保育と小学校の授業の連続性と個別性を担保した教育実践が可能になると考える。そこで、本研究では「造形遊び」授業を軸に、幼小の「個別性」と「連続性」を捉えるとともに、小学校教員の授業イメージの見直しを促したいと考えた。

(3) 年次研究過程

①平成 22 年度

平成 22 年度は、実践協力者との研究体制づくりを中心に行った。

授業・保育実践データを収集するために、幼稚園・保育所と小学校の 4 学年で同じ素材（梱包用に使用されている、デンブン由来の成分による発泡性緩衝材エコフォーム）を用いた造形の保育及び図工の授業実践を計画し実施した。さらに、研究協力者とともに、その授業・保育映像をもとに内容について検討し、幼・保と小学校の保育・授業の特性について仮説を導き出した。

また、教師の意識調査に関して、幼・保の保育者と小学校の教員に、同一の授業映像を視聴させてアンケートを実施するという手法で調・分析を行った。また、以前からの調査研究も含めて大学紀要にて「幼稚園と小学校の教師が持つ保育・授業観とその形成 - 幼小接続のための相互理解に向けて -」を報告した。

さらに、1 年間の研究の総括として、研究内容に関連する基本的な考え方について、大阪児童美術研究会の研究紀要において「幼稚園と小学校の保育と授業をつなぐイメージの共有」を報告している。そのほか、これまでの研究の知見に加えて、本研究での成果を踏まえて、研究分担者が図書「新時代の保育双書 保育内容 表現」において「幼小連携の重要性」について紹介した。

②平成 23 年度

23 年度は補助金が 7 割と 3 割に分けて配分されることとなり、且つ後期配分の 3 割については配分されないことも想定されたため研究計画当初予定していた海外視察について見直しを行った。

研究協力者である幼・保の保育者ならびに、小学校の教員と協議を行い、22 年度の研究成果をふまえ、継続的に行ってきた教材開発の研究と、幼・保の保育と授業実践についての相互鑑賞に基づく意見交換を行い、授業モデルについての見直しを行った。

研究経過については、平成 23 年 8 月 6 日、7 日に開催した研究会「美術教育実践者研究交流会」において行った。

③平成 24 年度

最終年度にあたる 24 年度は、23 年度に行ってきた教材開発を継続し、木材を主材料に

した造形遊び題材を、幼稚園年長児及び、小学校の低・中・高学年それぞれに合わせて設定した。題材の設定にあたっては、幼小の教育内容を踏まえたものとしながら、子どもたちが材料から発想し造形活動を展開していくという点においては、できる限り共通性を持たせるように検討を進めた。

木材を主材料としたのは、以下のような点を勘案してのことである。

- ・ 多様な造形活動が可能である材料であること
- ・ 特殊な用具・道具が無くても造形活動ができること
- ・ 一般的な造形材料であること
- ・ 安価で（実際お金はかかっている）収集が可能であること

また、以前に比較研究を行った粘土が不定形の材料であったため、今回はそれとは異なる材料と言うことも勘案している。

木材は、近隣の製材所の協力を得て、そこで出る端材を用いている。端材であるため木材の太さは 2cm×3cm 程度の角材から、5cm を超えるものまで様々であった。長さに関して当初は、各学年で同じものを用いようと考えていたが、授業者の判断で、これまでの経験を踏まえ、年齢に応じて多少の違いを持たせることとなった。具体的には、幼児及び低学年では、やや小さく短い木片を中心に使用し、中学年、高学年と学年進行に従って、長い木材も使用している。これは、児童画表現したいと思う内容を想定してのことである。また、使用する材料の分量も、当初は同数ぐらゐを検討したが、それぞれの子どもの活動量等を勘案し、異なる量を準備している。

ただ、実施に二カ年を要したため、年度をまたいでの実施となり、23 年度に題材内容を検討した教員が、24 年度には異なる学年の担任となるという事態が生じた。結果、題材を検討したメンバーとは異なるメンバーで実践を行っている。そのようなこともあり、実践を実施する中で、題材内容の見直しを行っている学年もあった。

(4) 調査の方法

各々の実践は、題材の導入から終末までをビデオカメラを用いて流し撮りで記録。また、あらかじめ 3～5 名を無作為に抽出し観察対象児とした。観察対象児については、先のビデオカメラとは別に、導入・展開・終末の 3 つの時期を設定して各々の取り組みの様子を映像で 5 分間記録するとともに、写真で撮影した。観察対象児の活動の概略については、わかりやすいようにマップ化した。(図参照) また、各実践は、まず実践者が活動内容を記述すると共に、考察を行い、その上で、幼・小学低・中・高それぞれのグループで、実践者が集まり、共通性について考察を行った。

その上で、全体を通して研究分担者が分析した。分析にあたっては、アフォーダンス、認知的未成熟説等の考え方を参考にした。



図 観察対象児のマッピング例

4. 研究成果

本研究を通して次のような成果を得ることができた。

まず、幼稚園、小学校低学年、中学年、高学年各々の段階において、以下のような特徴を見いだすことができた。

- ・ 幼児の造形活動では行きつ戻りつ、の繰り返しのある循環的な行為が目立つ
- ・ 低学年児は「並べる」や「積む」という行為が見られるものの、すでに何をつくるかというイメージができており、イメージ通りになったら活動を終える。
- ・ 中学年児は、試行錯誤を繰り返しながら様々な動きを生み出し具体物への見立てへと発展するなど、活動時間は伸長し、目的を持って継続的に取り組む。
- ・ 高学年児は序盤では、「つなぐ」、「合わせる」、「積む」という幼児と類似した行為が見られたが、中盤から終盤に掛けてつくりたいもののイメージをもって活動に取り組む。

以上のことを踏まえ、幼小の接続を踏まえた授業に関して次のような特徴を見いだすことができた。

- ・ 同じ素材でも年齢によってアフォーダンスが異なる。
- ・ 年齢が高くなると、視点や目的にある一定の制約を設けることで、より深い学びへと発展させ得る。
- ・ 年長と低学年児に見られる、つくる行為を繰り返す過程での共通性は、技能ではなく思考力の視点から造形教育に関わる幼小連携のあり方を示唆する。
- ・ 学年が上がり知識や経験が豊かになる程、それらを革新する発想の転換や再構成を促す教師の教材研究や授業づくりが必要となる。

本研究によって、幼小の接続のあり方を考

える上で多くの知見を得ることができた。しかし、実践の例数が十分に収集できたとはいえない。今後は、補助金による研究活動で作り上げた現場教員との研究協力体制を維持・発展させ、さらに多様な造形活動の事例の収集に努めたい。そして、中学校等も含めた、義務教育課程の再編を見通した、カリキュラム研究として継続して研究を進めていこうと考えている。

また、その一方で、本研究の成果を、教員の力量形成という視点からとらえ直し、実践知を指導力に生かしていく研究へも発展させていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 山田芳明, 幼稚園と小学校の保育と授業をつなぐイメージの共有, 大阪児童美術研究会紀要, 査読無, 第75巻, 2011, 60-63
- ② 廣瀬聡弥, 幼稚園と小学校の教師が持つ保育・授業観とその形成-幼小接続のための相互理解に向けて-, 美作大学・美作短期大学紀要, 査読無, 第56号, 1022, 22-33

[学会発表] (計2件)

- ① 山田芳明, 「造形遊び」の授業における教師の指導力に関する考察, 第5回中日教師教育学会研究集会, 2012年9月14日, 北京師範大学(中華人民共和国)
- ② 山田芳明, 西尾正寛, 廣瀬聡弥, 造形遊び実践に基づく幼小の個別性と連続性についての考察, 第35回美術科教育学会島根大会, 2013年3月29日, 島根大学教育学部(島根県)

[図書] (計1件)

- ① 中川香子, 廣瀬聡弥, 他, 株式会社みらい, 新時代の保育双書 保育内容 表現, 2010, 176

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 芳明 (YAMADA YOSHIKI)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号: 80363175

(2) 研究分担者

廣瀬 聡弥 (HIROSE TOSHIYA)
美作大学・生活科学部・准教授
研究者番号: 40419461
西尾 正寛 (NISHIO MASAHIRO)
畿央大学・教育学部・教授
研究者番号: 50441449